

氏名	はせがわ ちひろ 長谷川 千尋
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第284号
学位授与の日付	平成16年5月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	室町期連歌の研究

論文調査委員 (主査) 教授 大谷雅夫 教授 木田章義 助教授 大槻 信

論文内容の要旨

本論文は、室町時代から江戸時代にかけての連歌資料（学書、論書、句集、千句注釈書）の諸問題について考察するものである。以下の各章は、連歌史の時代区分に則したものとなっている。

第一章

本章では、南北朝から室町前期にかけて成立したと見られる『梵灯庵袖下集』という資料を取り上げる。梵灯（貞和五年1349—応永二十四年1424存）は、二条良基の弟子で、応永年間を代表する連歌師である。本書は連歌の語彙注釈書の嚆矢とされており、地下連歌師に伝えられた非正統的知識の様相を明らかにするものである。諸本は甲類から丁類の四系統に分類され、系統ごとに項目の構成や注釈内容が著しく異なっている。従来「至徳元年弥生上旬 梵灯庵主書之」の奥書のある甲類が梵灯の手でまず成立し、門弟らが乙類、丙類を編集したとされてきた。しかし諸本の内容を比較検討すると、甲類はむしろ最後に成立したのであり、甲類奥書は梵灯に仮託したものと考えるのが妥当である。また、特定の作者を想定するよりも、複数の人々の手で多くの異本が編まれたと見るべきである。以上が第1節「『梵灯庵袖下集』の成立」に述べたところである。

第2節「『梵灯庵袖下集』の周辺—『連歌秘伝抄』を中心に—」では、『梵灯庵袖下集』の流布の一斑を『連歌秘伝抄』をもとに考察する。『連歌秘伝抄』は、連歌に用いる言葉を百三条に亘って解説したものである。出典を調査すると『梵灯庵袖下集』からの抄出に『六花集注』からの抄出を加えて成り立っている。本書は、現存する『梵灯庵袖下集』の複数の系統に一致する上に、その一伝本の巻末に付された追加項目のようなものとも一致する。そこから、『梵灯庵袖下集』には恐らく現在確認されていない系統が存在したのであり、本書はそのような本を参照したものと考えた。また、『六花集注』と『梵灯庵袖下集』は近い環境で享受された資料であると言われるが、本書はその例証となるものである。

しかし、『六花集注』と『梵灯庵袖下集』には内容上の隔たりもある。京都大学文学部国語学国文学研究室額原文庫蔵『初心求詠集』（宗砌著）の付載記事は、『梵灯庵袖下集』の異本とされている。ところが、その中には『梵灯庵袖下集』とは異なる、もっと正統的な説が見られ、その説は『六花集注』に一致する。額原本の付載記事は『梵灯庵袖下集』と直接の関係を持たないと考えられる。

第二章

梵灯から宗砌（?—享徳四年1455）へと引き継がれた連歌は、宗砌の弟子、宗祇（応永二八年1421—文亀二年1502）の時代に一層洗練されたものになり、連歌史上の最高峰に達する。本章では、宗祇及びその弟子であり宗祇と並んで活躍した兼載（享徳元年1452—永正七年1510）の句集について考察する。

第1節「『萱草』の研究」に取り上げるのは、宗祇の第一句集『萱草』である。本句集は、文明六年（1474）二月に青蓮院尊応によって清書された（奥書A）が、外題並びに奥書Aを染筆した人物は明らかでない。しかし同年三月の奥書Bから、奥書Aは伏見宮貞常親王に進上するために「北麓野叟」が記したものであり、「北麓野叟」は比叡山麓岩倉に住した聖護院

道興ではないかと推定する。諸本は清書本系統と草稿本系統に分かれる。清書本系統の中で、京都大学頼原文庫蔵本（恋部）と、肖柏筆と伝える宮内庁書陵部蔵本（雑部前半）、徳川美術館蔵本（雑部後半）、思文閣目録所載本（冬部）の三本はツレの関係にあり、室町中期写の最善本である。また、奥書Bを有する唯一の伝本である京都大学谷村文庫蔵本は、それに次ぐ善本である。

兼載の句集『園塵』には、年代順に第一から第四までがある。第2節「『園塵』第一の研究」、第3節「『軽塵』と『園塵』第二」は、それぞれ『園塵』第一、第二の問題点について考察したものである。『園塵』第一の諸本は三系統に分かれる。このうちⅢ類本は、Ⅰ類本の句を削除して詞書や配列を整えたもので、兼載による改編を経ていると考えられる。Ⅲ類本を成すにあたり、兼載が新作を加えなかったのは、既に『園塵』第二が纏まりつつあったためであろう。Ⅲ類本は遅くとも明応三年（1494）九月までには成立しており、改編の目的は、『新撰菟玖波集』編纂に備えての作品整理というところにあったと考えられる。

『園塵』第二の異本に『軽塵』がある。所収句の年次から推して『軽塵』がまず明応元年（1492）冬頃に成立し、『園塵』第一よりも小規模の句集という意味を込めて「軽塵」と命名されたものと思われる。そして、明応三年末から翌年初にかけての時期に『軽塵』の一部を削除し、新作を加えて成立したのが『園塵』第二である。『園塵』第二の編纂は、『園塵』第一の改編（Ⅲ類本）に次いで着手されたものと思われ、やはり『新撰菟玖波集』編纂に向けての準備の一環であったと見ることができる。

第三章

宗祇の没後も、その直門の弟子達が旺盛な活動を続ける。この頃の代表的な作品の一つに、宗長（文安五年1448—享禄五年1532）・宗碩（文明六年1474—天文二年1533）両吟の『伊勢千句』がある。本千句は伝本が多く異種注が多いことで他に類を見ないものである。本章では「『伊勢千句注』研究序説」として、『伊勢千句』諸注の考察を試みる。

『伊勢千句』は、大永二年（1522）八月四日から八日にかけて、伊勢山田において伊勢神宮の神官や御師らの世話で興行された。加注本の中では精注群と呼ぶべきものは、金子金治郎氏により七種類に分類されている。しかし、その後に見つかった新種の注も少なくない。例えば京都大学文学部に蔵される国文A本と国文B本もそれぞれ新出の伝本である。『伊勢千句注』の中で第一種注と第二種注は近い系統であるが、国文A本は第一種注とほぼ同文の注が見られ、第二種注との関係は希薄である。国文A本はまた国文B本とも類似しており、注釈内容や本歌本説の詳しさの点では、第一種注よりも国文B本に近い。国文B本は上巻のみの伝本であるが、下巻のみの第五種注と、文体や本歌本説の引用に共通点が認められ、近い時代や環境で成立したと推測される。

第三種注と第四種注は上記の注とは別系統のものである。第六種注と第七種注は、書き入れや異本注記を含めて比較すると、核となる部分を共有しながら少しずつ異なる注となっている。両注には、千句の座に臨んで直接見聞したかのような描写が見られ、同じ講釈を聞き取った者の手で複数の異本が編まれたものと考えられる。

第四章

永禄六年（1563）には、宗祇の弟子や孫弟子達もみな世を去り、里村紹巴（大永四年1524—慶長七年1602）が連歌界の第一人者となる。この時代に連歌史は最後の頂点を迎えることになるが、紹巴の連歌については、「やすやすと更に深き事を嫌」う作風であり、宗祇流の連歌を断絶させたという批判的な指摘がある（歌道聞書）。第1節「「やすやす」とした風をめぐって—紹巴の連歌と寄合書—」では、この指摘について「やすやす」という標語の語義、紹巴時代の寄合書の二方向から検証する。その結果、紹巴の連歌観も宗祇の教えに即しているが、紹巴流は付所を一本に絞り、知識を要求する伝統的寄合を避けて誰もが納得できる因果関係によって展開させる付様であることがわかった。それは大衆化する連歌を俳諧から守るために、紹巴が意図して推進したものであった。

この当時の連歌について、紹巴は「昔より去嫌一段きぶくなり、付所も一段細に成申候」（『至宝抄』）とも述べている。こうした当代の連歌に限界を感じ、昔の連歌に範を求めたのが、第2節「『大原三吟』の研究」において扱った『大原三吟』である。本書は、宗祇、宗長、櫻井基佐が大原の十如院を訪れ、三人で問答を交わすという形式の連歌論書である。問答体であること、仏説に付会した所説や典拠未詳歌が見られること、作品中、基佐の句が最も高く評価され、基佐の師心敬の説を引くところなどから、室町後期に成立したという『基佐心敬問答』との関連が窺われる。どちらも心敬の頃の連歌に範を

求めたものであり、底には当流の連歌に対する批判意識が流れている。写本、古活字本、製版本として流布し、諸本に十一月本と十月本の二系統がある。

第3節「素丹聞書『称名院追善千句注』」では、紹巴の代表作である『称名院追善千句』の注釈書を取り上げる。肥後国の連歌師素丹は、天正三年（1575）に上京した折、紹巴から『称名院追善千句』の講釈を受ける。そして帰国後の天正十五年（1587）、紹巴自注に自らの聞書を加えて「素丹注」を完成させる。「素丹注」は、作意の明らかな句に対しても説明を怠らない懇切な注であり、内容上、自注と齟齬を来すようなことは、僅かな例外を除いてほとんどない。また、本文を紹巴所持本に拠り、多数の異本を参照して校訂を行っているため、本文的にも信頼できる資料である。

この「素丹注」の序文には、『称名院追善千句』には禁詞が多く詠まれていると指摘する。禁詞は、嫌詞などとも言い、連歌において特定の言葉の使用を制限・禁止するものである。そこで、第4節「禁詞考」では、南北朝から室町末期までに編まれた禁詞の書の流れを追い、紹巴の時代に規範となった書物を探る。それをもとに『称名院追善千句』における禁詞の使用状況を見ると、同千句には確かに禁詞が多く詠まれているが、大半は条件付きで許容された語であり、百韻に比べて自由な詠みぶりが許される千句において、禁詞をも巧みに読みこなしていることがわかる。自注・素丹注においては、初心者安易に禁詞を使うことのないよう誡めているのである。

第五章

本章では、「『連歌提要』に見る里村家の連歌学」として、江戸中期に成立した『連歌提要』という学書を取り上げる。本書は、連歌書を博引しながら「てにをは」等について考証したものである。江戸時代の資料ではあるが、時代が下って初めて書きとめられる事実もあり、室町期の連歌について考える上でも有益である。

著者については、俳諧師水間沾徳であるとも言われていたが、実際には井上昌海という里村家直門の連歌師の手になるものである。京都大学文学部所蔵の一本は、正徳五年（1715）の奥書を有する昌海自筆本であり、他本には記されていない引用資料名や口伝の中身までもが明らかになる。それによると『連歌秘極抄』『連歌秘書』『連歌三部書』以下、三十点を越える連歌書や歌書（逸書を含む）が引用されており、里村家において重んじられた書物を具体的に知ることができる。また、多くの先行書に拠りながら、決して前代の踏襲に止まらない点にも本書の意義が認められる。

論文審査の結果の要旨

和歌より派生した連歌は、和歌や俳諧と並んで、わが国の韻文学の根幹をなす文芸であった。しかし、和歌についての学問が、鎌倉時代以降の歌学の伝統が近世、そしておおむね近代へも継承されていったのに対して、連歌においては、中世の連歌論は近代の学問に引き継がれることはほとんどなかったと思われる。連歌研究は、近代いったん断絶したと言っても過言はない。連歌には式目とよばれるあまりにも煩雑な約束事があり、作品の読解に甚だしい困難のあったことがその理由の一つであろう。しかし、より根本的には、複数の人が寄り集って互いに句を作りあい、それを鎖のように連ねてゆくという連歌の形式が、個人の感情や思想の表現を重んじ、表現における個性の発露をたつとぶ近代的な文芸観の受け入れるところとならなかったことに、その原因があったのではないか。そのことは、おそらく俳諧についても基本的には同じ事情のはずだが、俳諧はひとりの作者をもつ発句を中心に鑑賞され、むしろ芭蕉の発句などのように偏愛されることさえあった。それに対して、あくまでも連衆の文芸であった連歌は、わずらわしい約束事ばかりの多い贅沢な遊び事として、敬して遠ざけられてきたというのが現状であろう。

そのような状況に一石を投ずべく、京都大学が所蔵する連歌関係の資料を編纂し、それに詳細な解題を付して出版されたのが『京都大学蔵 貴重連歌資料集』（全六巻・臨川書店）であり、平成十三年以降、博士課程大学院生の身でそれをほとんど独力で編纂し、翻刻と解題の執筆に縦横無尽の活躍を見せ、やがて平成十六年の完結までにこぎ着けた立役者が論者であった。本論文は、その解題を中心に、室町時代から江戸時代にかけての数多くの連歌資料についての論考を収める。

第一章は、『梵灯庵袖下集』という連歌に用いる語彙の注釈書についての諸本論である。連歌実作の時に随時参照されたとされるこの書は、使用者が自分の便宜のために抄出を試みたり、また増補したりすることにより、さまざまな異本を生み出した。論者は、現在見られるかぎりの十八の諸本を比較検討し、それを甲乙丙丁の四類に分類し、その前後関係について考察した。その緻密な考証の結果、古形を留めると従来考えられてきた甲類の諸本がむしろ新たな異本であり、それらを

古形と判断させてきた奥書がかえって後世の仮託であったことが明らかになった。

以下、第二章は、宗祇の第一句集『萱草』、兼載の句集『園塵』『軽塵』についての諸本論。第三章は、宗長・宗碩両吟の『伊勢千句』について作られた、従来知られなかった注釈書の紹介と分析。そして第四章は近世初頭の連歌師紹巴の連歌論とその千句の注釈書についての考証。第五章は、江戸中期の『連歌提要』という資料について、その作者についての従来の説を訂正する論である。

すなわち、本論文は、室町時代から江戸時代の数多くの連歌資料の中でも最も大切と考えられるもののすべてについて、それぞれまことに綿密な書誌的研究を施し、多くの新たな知見を得たものである。近代的な研究の対象とされることのたち遅れた連歌が、まずはその資料の研究から始められなければならないことは言うまでもない。本論文の連歌資料研究はその見事な達成であり、今後の連歌研究の基礎を固めるものとして、高く評価できるであろう。

しかしながら、その反面、本論文が、連歌論についての論考を一部に含むものの、連歌作品そのものの読解、分析をどこにも有たないことには、やはり飽き足りない思いがあると言わざるを得ない。連歌が室町時代の人々にほとんど熱狂的に迎えられたのはなぜか。どこに連歌の面白みがあったのか、和歌や俳諧とは異なる連歌の特質とは何か。そのような素朴な疑問を問おうとする姿勢が、特に近代的関心から外れがちな連歌の研究には失われるべきではない。連歌作品の読解に卓越した能力を有する論者には、「室町期連歌資料」だけではなく、「室町期連歌」そのものを主題として、なお研究を積み重ね、新たな境地を切り開くことが期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十六年三月三十日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。